広告

企画・制作　LEXUS NEW TAKUMI PROJECT 実行委員会

播州なめし革の風合い生かし 時代に合った革靴づくりに挑む

片山 喜市郎　兵庫県／革職人

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」（主催：レクサス）は、日本各地で地域の独自性や技術を生かし、新しいモノづくりに挑む「匠」を応援する。

レクサスが日本全国の「匠」のモノづくりを応援

プロジェクトのスーパーバイザーに、放送作家として多くのヒットを手がけ、くまモンの生みの親でもある小山薫堂氏を迎え、隈研吾氏（建築家／東京大学教授）、グエナエル・ニコラ氏（デザイナー）、清川あさみ氏（アーティスト）、生駒芳子氏（ファッション・ジャーナリスト／アート・プロデューサー）、下川一哉氏（意と匠研究所）らをサポートメンバーに発足。第一回となる今回は、全国47都道府県から地域推薦、一般公募合わせて52名の若き匠が選出された。

昨年夏、レクサスギャラリー高輪で行われたキックオフ・セッションを皮切りに、サポートメンバーが実際に工房を訪ねるエリア・コンサルティングを重ね、匠は自身のアイデアを磨き、プロダクトづくりに取り組んだ。「本当に欲しくなるプロダクトか？」「地域のオリジナリティーはあるか？」「コンセプトやターゲットは明確か？」など、サポートメンバーから真剣なアドバイスが行われ、匠は約一年の試行錯誤を経てプロダクトを完成させた。

1月18日に都内で行われたイベントでは全国の百貨店、セレクトショップのバイヤー、メディア、デザイン関係者などに向けてプレゼンテーションを実施。世界へ羽ばたく足がかり、ビジネス拡大のきっかけとなるチャンスを手にした。

「伝統」を守りながら「新しい」感覚やテクノロジーを吹き込む。「地域」の特性を深めながら、その魅力を「世界」へ広く発信する。日本のモノづくりを支え発展させ、そこから新しい価値を生み出そうとしているレクサスのブランド思想の1つである「二律双生」を、地方創生×モノづくりの視点で実現するプロジェクト。兵庫県選出の匠、革職人・片山喜市郎さんの思いと、完成したプロダクトを紹介する。

エリア・コンサルティングにて

1月18日、プレゼンテーションにて

スーパーバイザー
小山 薫堂氏

1964年6月23日 熊本県天草市生まれ。日本大学芸術学部放送学科卒。「料理の鉄人」や「ニューデザインパラダイス」、映画「おくりびと」など数多くのヒット作品の企画・構成に携わる。「くまモン」の生みの親でもある。

自らつくった靴を売りたい一心で

「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」兵庫県代表の片山さんは1917年に神戸・元町で創業した靴小売店の4代目だ。「仕入れて売るだけの商売では大型店にかなわない」。そう考えた片山さんは3年間のサラリーマン生活の後、「自らつくった靴を売っていこう」と、靴の学校に通い始め、皮革の縫製、加工技術を習得。2010年に革小物を製造販売する「スタジオ キイチ」を開業する。まずは材料が少なくて済むシンプルな財布や小銭入れなどを店頭に並べるとすぐに評判を呼ぶことになった。

支持された理由は二つ。皮革の風合いとカラフルな色のバリエーションだ。姫路・たつの地域を中心とした播州なめしは全国のなめし革生産の約6割を占める。独特の滑らかでふわっとした風合いは熟練職人による最後のワックスの浸透のさせ方で際立たせる。また、色は青やオレンジ、紫など12色をそろえた。「ものがシンプルなだけに色の変化を楽しんでもらいたいと思った」。

デザインについても使う人の動作を考慮した機能的な形を追求し、サンプルを作った後に必ず使用試験を行って、サイズ、革やマチの厚み、ポケットの深さや幅、開閉方向など、細部に至るまで微調整を行っている。

作品製作中

完成プロダクト「サイクリングシューズ」

現在は長財布、折り畳み財布、型押しのバリエーションも増え、商品アイテムは60種類にまで増えている。商品には鋲のマークを刻印し、神戸らしさも演出。神戸土産としても選ばれているという。

職人と対話重ね、納得いく素材に

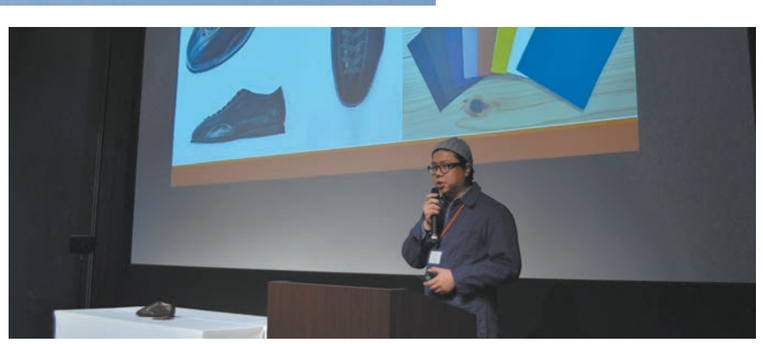
今回、「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」では靴づくりに挑んだ。「いつか靴をと考えていたが財布に比べ手間がかかるので遠ざけていたところがあった。家業の靴店が今年創業100年目を迎えるタイミングもありこの機会を生かして今の時代に合った靴を提案したいと思った」。

デザインでイメージしたのは街履きもできるサイクリングシューズ。素材に使う皮革をどうするかまず考えた。「濃いチョコレートブラウンで、使い込むうちに色合いに深みが出る」が片山さんの描いたイメージだった。なめし職人と対話を重ね、植物性の渋を使うタンニンなめしの手法を使うことにした。山羊や馬、牛などの皮革を比べ、皮革の厚み、塗料の調合、使うワックスの分量を考えながら納得のいく素材に仕上げた。

デザインは木型作りから始め、パーツごとに材料業者を訪ねて思いと形を伝えていった。靴底はペダルの踏み込みが伝わるように薄めにした。靴ひもの穴はより足に固定しやすいように10列にし、かかとをしっかり押さえるために固めの芯材を入れた。「初めてのことばかりで教わりながらだった」。発表まで約一年という限られた時間の制約が最大の苦労点だったという。

サポートメンバーでファッション・ジャーナリストの生駒氏からのアドバイスでは「つくって終わりではなく、使う人がどう感じるかを大切にして改良をしていく必要がある」の言葉が印象に残っており、今後のものづくりに生かしていきたいという。

今後は完成した靴をベースに、顧客の要望でパーツの色を自由に組み合わせられるオーダーシューズにすることを目指している。「どこにでもあるような靴をつくっていては目を引かない。今後はサイクリングシューズのほかに社交ダンスや乗馬用のシューズなどある特定のユーザー向けに特化した靴づくりにも挑んでいきたい」と話す。



作品プレゼンする片山さん

職人の価値を伝え、世界に発信

姫路・たつののなめし皮職人を訪ねるたびに感じるのは深刻な後継者不足だ。「研究熱心な職人さんは多く、われわれのようなメーカーとつながる機会も増えて、納得がいく皮革を作りたいと考えておられる。この大切な資産を守るためには、職人さんの価値を消費者にも認めてもらい、しっかりと価格に載せていかないと」。

今回「LEXUS NEW TAKUMI PROJECT」で知り合った匠と新たな連携が生まれた。鹿革に漆で模様を付ける甲州印伝の職人、山本裕輔さん（山梨県）とタッグを組んでレクサスの販売会社向けにカードキーケースをつくることになったのだ。「地方の職人同士が組めばさらに新たな可能性が広がる。日本の伝統技術を時代に合った物に変化させて世界に発信していきたい」と先を見据えている。

カードキーケース サンプル

片山 喜市郎
兵庫県／革職人

神戸元町で1917年創業の靴店に後継者として生まれる。大学卒業後、株式会社タクティーに入社。マーチャンダイザーに就任し商品バイイングや販売企画を実施し、売上管理や流通について学ぶ。退職後、靴学校にて革の縫製、加工技術を習得。2010年革小物を製造販売する「スタジオ キイチ」を開業。靴、革小物、鞄等の革製品へのさらなる知識と技術の習得、地域にマッチした新たなライフスタイルの提案に日々努めている。

LEXUS NEW TAKUMI PROJECT